

目的 これまで仕事着のうち、股引、腹がけ、地下足袋などの歴史的展開過程と、構成技法を究明してきたが、今回は、陸（おか）足袋をその対象としてとりあげた。

人の足は複雑、多様な曲面をもって立体的に構成されており、これにフィットさせると共に動きに適応する機能性をもったものが要求される。明治初期、洋裁技術導入に当って和装品のうち、数少ない立体構成技法を体得していた足袋仕立職人がその原動力になったことは、良く知られているところである。

方法 現在東京都内に数軒残る誂え足袋受注職人により、その製作技法の実態を調査し、資料として幕末から明治初頭に用いられたとみられる栃木県塩谷郡高根沢町、宇津家遺品足袋12足を用い、対比考察した。文献資料としては、長物師のための指南書、明治19年刊行「初心法」と一般家庭婦女子対象の、ねずみや足袋店主、野村福蔵による明治39年刊行「足袋の裁ち縫いおけいこ」ほか裁縫書などを用いた。

結果 足袋作りの真髄は、寸法測定とそれに基づく型紙作りにあり、これは店主が行ったものである。縫製上は「つま付け」が勘どころといわれ、永年培かわれた日本人足型の徹底した研究蓄積の上に生まれた技法である。外観、はき易さの尺度をどこに置くかは、製作する職人の見解により異なるものである。誂え足袋と称しても現実には基準型を寸法に合わせて手直ししたり、縫製の一部分を下職に出すなどが行なわれており、正統的技法の継承が懸念されるのである。